



二仏像成り御堂に坐す



はじめに

本日はようこそご参詣くださいました。

身代り不動明王さま大祭の吉辰を卜して、阿弥陀如来と薬師如来の開眼供養がおこなわれましたこと、慶賀至極に存じます。

一昨年二月、本尊大日如来さまの開眼法要がおこなわれ、その時も今日と同じように、私が開眼師をつとめさせていただきました。

皆様、さきほどごらんられましたように、「拈香法語」ねんこうぼうごと申しまして、長い線香を拈じて

法語を唱えました。その法語は『成寿』の第十二号に載っておりますが、今日の話と関連がありますので、前の部分をかみくだいて申し上げます。おおよそ次のようなことを申し上げたのであります。

方丈さまは、二十年前、この寺をお開きになり、身代り不動明王さまをお祀りになられ、一心に山門の興隆を祈願されました。すると日に日に法運が開け、わずか二十年で、檀家数は横浜随一となり、さらには、他の寺々では到底考へも及ばない、海外に留学僧を派遣して人材を育成するという、まことに破天荒の大事業を推

進し、横浜に善光寺あり、と知らない人か
ないほど知名度の高い寺院になりました。

「善光寺さん、すごいですねえ」

と、会う人はみなそう申されますが、方丈さ
まは決して自らの功を誇らず、

「それはお不動さまのおかげです」

と、合掌してこたえるのが常でありました。

そして、なんとかしてお不動さまにご恩返し
をしなくてはと、前々から考えておられたこと
を私はよく知っておりました。

不動三尊の造頭

果せる哉、昭和六十二年、ここにお見えの錦戸
新観先生を煩わし、まことにりつばな矜羯羅童
子・制吒迦童子を造頭、勧請し、まず以ってお不
動さまにご恩報謝の一端を披瀝されました。

お不動さまは、八大童子、三十六童子といっ
た眷属、つまり部下を従えておられます。

聖無動の眷属、三十六童子、各千万童
を領す。本誓悲願の故に、千万億の悪鬼、
行人を燒乱せん時、此の童子の名を誦す
れば、皆悉く退散し去る。若し苦厄の難あ
らん、呪呪病患の者は、當に童子の號を呼
ぶべし、須臾にして吉祥を得ん。恭敬禮拜
する者の左右を離れず、影の形に隨うが如
く護り、長壽の益を獲得せしむ。

と、経文にありますように、お不動さまの眷
属三十六童子はそれぞれ千万人の童子を手足の
ごとく使い、衆生済度の大誓願を持っておりま
すので、たとえ千万億の悪魔があつて人びとの
心をかく乱しようとする時、この童子のお名前
を唱えると悪魔は悉く退散してしまふ。また、
苦難や災害に逢つたり、呪われたり病魔に襲わ
れた時もこの童子の名前を呼ぶと即座に安樂吉
祥を得ることができる。童子を恭敬し禮拜する
者があれば、その身边を離れず、あたかも影の

形に随うがごとく護り、不老長寿のご利益を得させてくれる。

こういう眷属を随えているお不動さまなので、すから、そのご威徳は実に素晴らしいものであります。その眷属が一人も身近かにいないとなると、いかにお不動さまとはいへ、十二分にお力を發揮することはできないでしょうし、またまことにご苦勞なこともあります。

さて、数多くの眷属の中でも代表格の矜羯羅・制吒迦の二童子はお不動さまの脇侍として左右にはべつており、不動三尊ともいわれるのですが、不動三尊即不動明王といわれるほど不二一体のおはたらきをしているのであります。

そこで方丈さまはまず矜羯羅・制吒迦の二童子を勧請されたのですが、これは身代り不動明王さまのこれまでのおはたらきに対するご恩報謝であり、また今後いっそうのご利益をお願い

する気持をあらわされたものであります。

身代り不動明王さまは矜羯羅・制吒迦の二童子を身近かに随えられて、たいへんおよろこびになられたことでありましょうし、また、当善光寺をさらに一段と法運の盛んな寺に導いてくださることでありましょう。

大日如来

ところでお不動さまは大日如来の化身であります。

大日如来さまはなぜ化身をあらわす必要があるのか。それはおいおいわかってきますが、学校の先生にたとえると、校長先生は学校の経営全般を掌握する偉い先生でありますだけに近付きがたい一面があるのですが、校長先生の意を体した受持ちの先生となると親しみやすいのと同じように、大日如来は宇宙の根本仏でありますので、いわば校長先生のようなものでありま

す。そこで私どもの身近かにお不動さまとして、校長先生ではなく、受持ちの先生としてお姿をかえてあらわれるのであります。

さて、これまでのようにお不動さまだけという、受持ちの先生だけしかいない。学校でいうと分校に過ぎないようなものであります。そこで方丈さまは再び錦戸先生にお願いして、一昨年、大日如来の尊像をお造りいただき、ご本尊にお迎えされたのであります。校長先生が身近かにおられると受持ちの先生も力強いと同じように、身代り不動明王さまはどんなにか心強いことであります。また、この不動殿も分校から本校に昇格したように一段と素晴しくなりました。

そしていままた薬師如来・阿弥陀如来と、いわば副校長お二人をお迎えしましたので、不動殿は大きな大きな本校となったようなものですが、それはさておき、大日如来さまはどういう

仏さまなのでしょうか。

大日如来は梵語で「ヴァイローチャナ」とい、それを音訳したのが「毘盧舍那」であります。毘盧舍那仏は略して盧舍那仏ともいいますが、盧舍那とはもともとインドで太陽のことで、「遍一切処・光明遍照」ともいわれ、この仏さまの靈妙不可思議な光明はあまねく法界を照らし、さわりなく円満で明らか（無碍円明）であるといわれます。光明あまねく一切を照らすということ、太陽を人格化した仏ということであり、毘盧舍那仏は大宇宙の根本仏なのであります。

奈良の大仏は盧舍那仏であり、光明遍照、無碍円明のお徳をもつて真に明るく平和な、そして豊かな国造りをしようという願いのもとに国力を結集して造立されたものであります。

この毘盧舍那仏、大日如来のお徳を人間界に伝えるためにこの世にお出ましになられたのが

お釈迦さまであります。つまりお釈迦さまは人間の住む娑婆世界の受持ちの先生になられたわけです。

お釈迦さまは、人間世界の苦しみ悩みをつぶさに観察なされ、それぞれの苦しき悩みに応じて、それを救ってくださる仏さまをこの世に誕生させてくださいました。たくさんの仏さまをお説きになっておられますが、本日開眼なされた薬師如来と阿弥陀如来についてお話いたしません。

薬師如来

『法華経』に「現世安穩、後生善処」という言葉があります。現世では安穩で幸福な生活を送り、亡くなったら善処、すなわち浄土に生まれかわる。これは人間誰しもが望むところであります。

観音霊場を巡拝する人が、よく笈摺に「奉巡

拝××霊場。為現当二世安樂也」と書きますが、現は現世、当は当来(今)の世、来世のことですので、「現当二世安樂」は「現世安穩、後生善処」と同じ意味の言葉であります。

さて、有難いことに、薬師さまは現世安穩を、阿弥陀さまは後生善処を受持ってお護りくださるのであります。

まず現世安穩から申しますと、人間生きてゆくうえに、いろいろな苦しき悩みや恐怖に遭遇します。それらを取り除かなければ安穩な生活は望むべきものですが、中でも病気はもっとも恐るべきものの一つであります。

今日は医学が進歩し、いい薬もたくさん出まわり、治療施設もとのつておりますが、それでも病気は恐ろしいものであります。ましてや昔、医者もいない、薬もない、といった時代であれば、病気はどんなにか恐ろしいものだったことでしょう。それは日本にはじめて入って来

た仏さまが薬師さまであつたことでもうなづけるところであります。

奈良時代、仏教が日本に伝来すると、法隆寺はじめ、薬師寺、東大寺など大きな寺が次々と天皇の発願によつて建てられました。これらのお寺にはほとんど薬師如来が祀られ、病氣平癒の祈願が、天皇はじめ民間の人びとの間でもさかんにおこなわれました。

薬師如来は読んで字のとおり、薬の師匠さまで、左手には薬壺、くすりの壺を持っており、右手は施無畏の印、右胸の前で手を開いております。これは不安や恐怖を取り除いてくださる印相、サインであります。

薬師さまの正式のお名前は「東方浄瑠璃浄土教主薬師如来」といいます。

『薬師瑠璃光如来本願功德経』というお経があります。その中に、「東方、此を去ること十、梵伽沙等の仏土を過て世界あり、浄瑠璃と名く。

ほとけを薬師瑠璃光如来正等覺明行円満善逝世間解無上土調御丈夫天人師仏薄伽梵と号し奉る」とあります。

梵伽沙というのはガンジス河の砂の数です。それはとても数え切れない数であります。十梵伽沙ですから、その数も切れないものの十倍という気の遠くなるような数、それだけの仏土、仏さまが教主となつておられる国を過ぎた東の彼方に浄瑠璃という名の国があり、その教主が薬師如来というのであります。

東の方とは太陽の出る処、朝日の昇る処、人間に光明を与える処であり、十梵伽沙とは無限の彼方、なかなか到達できない憧れの世界のことであります。瑠璃とは青紺色、ルリ色に輝く浄らかな世界のことです。

薬師如来はどういう仏さまかという、修行中の菩薩であつた時代に、生きとし生けるものに求めるものすべてを与えようと、十二の大

願を立て、それを悉く成就して東方淨瑠璃世界の教主として成仏された方であります。

薬師さまだけではありません。仏さまはみな修行中に大願を立て、それを成就して仏になられたのであります。次にお話する阿弥陀さまは四十八願、お釈迦さまは五百の大願といったふうであり、このような仏さまを仏教では報身仏といい、誓願や修行が完成し、その果報として得られた完全円満な理想的な仏とされておりません。

私の寺には薬師堂がありますので、毎月八日薬師さまのご縁日にはお詣りして『薬師如来本願功德経』を読みますが、第一の大願から第十二の大願まで、現世利益の誓願が多く述べられております。中でももつとも有名であり、またそこから「薬師」の名が生まれるようになったと思われる第七願は、

願わくは我、来世に菩提を得ん時、若諸

の有情、衆病逼切して、救なく帰なく、医なく薬なく、親なく家なく、貧窮多苦ならんに、我之名号一たび其耳に経なば、衆病悉く除こり、身心安樂にして、家属資具悉く皆豊足して乃至無上菩提を証得せん。

というのであります。

生きとし生けるものが、いろんな病苦にさいなまれ、看護も受けられず、医療も薬剤もなく、頼る者としてなく、貧しく苦しみ多い時、薬師如来の名号がひとたび耳にふれば、あらゆる病気はことごとく消滅し、身心安樂にして、衣食住すべてとのい、仏道修行に無上の悟りを得させよう、というのであります。

ただ単に病気をなおしてやる、物質的な満足を与えてやる、というのではなく、無上の悟りを得させようというこの誓願大悲により、どれだけ多くの人びとが救われたことでありましょ

う。また、医学の進歩した今日、依然として薬師さまが信仰されているゆえんはそこにあるのであります。

次に薬師さまの脇仏は日光・月光の二菩薩であります。日の光、月の光と書きますから、太陽と月のことで、東方、浄瑠璃の光の輝きが衰えないよう、昼も夜も信仰する人びとを守ってくださいるのであります。

また薬師さまには十二神将といって、甲冑に身を固め、いかりの相をしている武将姿の眷属がおります。これは、何かというと、今日は一日二十四時間ですが、昔は、子の刻、丑の刻、寅の刻といったふうに、一日を十二の刻に分けておりました。その一刻一刻をそれぞれ手分けして信仰する人びとを守ってくださいる神々なのであります。

阿弥陀如来

次は後生善処を受持つてくださる阿弥陀さまの話ですが、昔、昔、大昔、とても数字で書き表わすことのできない大昔、世自在王仏という、仏さまの御世のこと、一人の王さまがおりました。この王さま、世自在王仏の説法を聞いてたいへん感激し、自分もこの仏さまのようになりたいものだという願を起こし、ついに国王の位を投げ捨てて一介の出家沙門となりました。これが法蔵菩薩であります。

法蔵菩薩は、どうしたら世の中の人びとの苦しみをなくすることができると考えた結果、四十八の大願を立て、これを全部完成し、西方、十万億の仏国土を過ぎたところに極楽浄土を建立して、その教主、阿弥陀仏となられたのであります。

私の寺の本尊さまは、禅宗では珍らしく阿弥

陀さまですので、私は朝のおつとめ、奇数日には『観音経』の代りに『阿弥陀経』を読みます。『阿弥陀経』には、まず極樂の素晴しい光景が次のように描かれております。

極樂には、七重の垣と七重の宝石で飾られた網、七重の並木とがあつて、これらには金・銀・瑠璃・玻璃の四種の宝玉をあまねくめぐらしてある。また、七種の宝玉からできてゐる池があつて、八つの功德を備えた水がその中に充ち満ちている。池の底には金の砂が敷かれている。

池の四方には階段があつて、金・銀・瑠璃・玻璃の四種の宝玉で造られており、上の方には樓閣があつて、これまた金・銀・瑠璃・玻璃・磔碑・赤珠・瑪瑙の七種の宝玉で飾られている。

池の中には蓮華が咲いていて、その花の大きいことは車輪のようであり、青い花は

青い光、黄色い花は黄色い光、赤い花は赤い光、白い花は純白の光を放つて、それぞれえもいわれぬ清らかな香氣をただよわせている……

といったふうの描写が長々と続き、「これまで話を聞いた者は、まさに願を起こして、この国に生まれたいと願うべきである」「しかし、わずかな善行や福德を修めただけでは、この国に生まれることはできない」

ではどうしたら極樂に生まれることができるか。

もし善男善女があつて、阿弥陀仏についての話を聞き、それを心にとどめ、あるいは一日、あるいは二日、あるいは三日、あるいは四日、あるいは五日、あるいは六日、あるいは七日、一心不乱に阿弥陀仏のみ名を唱うれば、その人が臨終の時には、阿弥陀仏がもろもろの聖者たちとともに、その

者の前に現われる。そしてその人が死に臨んでも、心が乱れることなく、たちどころに極樂浄土に往生することができると説かれております。

そして、その次に、多くの仏さまが、阿弥陀さまの功徳を讃嘆し、このお経を説いたお釈迦さまの教えが真実であるということを証明しておりますが、その証明の仕方がたいへんおもしろいのです。

「広長の舌相をい出して、あまねく三千大千世界を覆い、誠実のことはを説きたもう」というのです。大きな舌を出して、あまねく三千大千世界を舌で覆って、説くことが真実である、と証明しておられるのです。

どうして舌を出すのかというと、インドでは最高の証明の方法は舌を出すことという考えがあるのだそうです。それは、ウソをいうと舌がくさってしまう。「私はウソをついてない、だから

ら、これこのとおり舌は健在だ」というのだそうで、ウソをいって、かげでぺろりと舌を出す日本とは逆です。

お釈迦さまの舌は広くて長くて、舌を出すと頭の髪のはえぎわまでとどき、顔全体を覆ったということ、広長舌といえます。この舌であまねく三千大千世界を覆うて誠実の言葉を説いたというのですから、時間空間を超越して真実のことはを説いたという証明になるのです。

したがって、一心に阿弥陀如来のみ名を唱えると極樂往生ができるというのは、決してうそ偽りではありませんが、一心になることは生易しいことではなくなたいへんむずかしいのです。

念仏ばーさん

或る絵の展覧会に、若く美しいママさんが子どもの口もとにスプーンで食物を運んでいる絵がありました。これを見た一人の禅僧が、「これ

じゃ、だめだ」と、つぶやいたので、そのわけをたずねると、「子どもに口をあかせようとすれば、匙を運ぶその人が大きな口をあけなくてはならぬのにこの美人はツンとすまして口を結んでいる」と答えたというのであります。

子どもに物を食べさせようという心(意)があれば、自分は食べなくても「アーン」と口を開き、そしてスプーンを子どもの口もとに運ぶという動作(身業)が生まれてくるように、身口意の三業(さんごう)が期せずして一つになるのです。かわい子子どもに對する時だけではありません。うれしい時も悲しい時も、身口意の三業が一つになって躍動するところに、まごころが相手に通じ、感応道交するものであります。

ほとけさまを拝む時もそうで、余念雑念をまじえない浄信そのものの心になった時、口はおのずから仏名を唱え、身体は合掌低頭するのであります。

むかし、或るところに「念仏ばあさん」といわれるほど、朝から晩まで念仏を唱えているばあさんがおりました。このばあさん、寿命尽きて、すべての死者のあゆむ道をたどり、エンマ大王の前に立たされました。エンマ大王はばあさんを一と目みるなり、

「地獄行き！」

と宣告しました。ばあさんは、エンマ大王をにらみ返して抗議しました。

「私は念仏ばあさんといわれたほどのものです。地獄行きとは見たて違いです。エンマさまにも、千に一つ万に一つ間違いがあるかも知れないと思ひ、生前に唱えた念仏を車に積んで持って参りました。調べてみてください！」

「ワシの目には狂いはないはずだが、証拠の品持参とあれば再審してつかわす。鬼ども、調べろ！」

そこで鬼どもが大八車に積んだ念仏を片っ端

から箕みでふるいにかけてました。すると、パッパッパッとみな飛び散ってしまうのです。ばあさんの念仏はカスばかりで実がない。

「それ見ろ、お前の念仏はみな空念仏ばかりだ。どうじゃ、わかつたか!？」

その時、赤鬼あかおにが叫びました。

「大王さま、一つだけ残りました」

「何、一つ残った？ どれ、どれ……ウーム、小粒ながらこれほんものだ!」

そこでこの一粒を調べてみると——或る夏の日のこと、彼女がお寺参りに出かけた時、一天にわかにかきくもり大雷雨となりました。ばあさん、大樹のもとに雨宿りしたところ、目の前の杉の大木に一大音響と共に落雷しました。その瞬間、ばあさん、思わず知らず「なんまいだ!」この念仏だけが実のあるただ一粒として箕に残りました。おかげではあさん、地獄行きは免れたということです。

念仏はまことに易しくてむずかしい仏道修行であります。この間の消息を伝える話を紹介しましょう。

二河白道にかびやくどう

一人の旅人が西に向って遠い道を歩んでおりました。そして人影のない、ただっぴろい沼地のようなところに辿り着きました。

ふと気がつくと、群賊悪獣がうしろから迫って来ます。『これはいかん!』と、死の恐怖にこのいた旅人が西に走りますと、突如として前に火の河、水の河が横たわっております。左手は火の河、右手は水の河。よく見ると真ん中に細い細い白道があります。二つの河とも向う岸までは約百歩ぐらいですが、底なしの深さであり、火の河は南に辺際なくのびており、水の河も北に際限なくのびております。真ん中の白く光った道は幅が十五センチばかりで、東岸より

西岸に通じており、その長さは河幅と同じく百歩あまりです。

わずか百歩ではありますが、水の河の波がこもごも打ち寄せては道を洗い、火の河の火焰は悪魔の舌のように道を甜めており、水火が交錯して休む間もない状況であります。

後方よりは群賊悪獸、右と左には毒蛇、毒虫、旅人ののがれる道はこの白道しかありません。

しかし、一步足を踏み入れれば水火の二河に足をさらわれること必定。しかし、いずれにしても死は免がれ得ない。ならば意を決して白道を進もう。万に一つ、渡れるかもしれない。

旅人がこう決心した時、うしろから声があつて、

「汝、ただ決定してこの道を進め。決して死ぬようなことはない。もし止まるなら、それこそ死あるのみ」と。

これはお釈迦さまの声であります。また西の

岸の上空より声あつて、

「汝、水火に墮ちることを畏れず、一心に仏を念じて直ちに來たれ。必ず汝を護るであらう」と。

これは阿弥陀さまの声であります。

旅人はこの勧めと招きの声を聞いて、直ちに白道に足を踏み入れました。すると東岸の群賊から声があつて、

「歸り來たれ。その道は渡り切れるものではない。われらは悪心を持つものではない」と。

旅人はその誘惑の声を耳を貸さず、一心に仏を念じ、ただ一筋の白道を直進すると、たちまち西岸に達し、永くもろもろの危難を離れ、善友と出会い、安泰をよろこんだのであります。

ここにいう水火の二河とは、人間の貪り愛する情を水に、瞋り憎しみの情を火にたとえ、真ん中の細い白道はその中に生ずる浄土を願うささやかな心を示したものであります。人間は貪

りや愛欲の水に押し流され、瞋りや憎しみの炎に身を焦がすのですが、その間にあって、お釈迦さまの勧め、阿弥陀さまの招きに耳を傾け、信心決定して一筋の道を進めば極楽浄土に到達できるというのであります。

むすび

さて、大日如来さまは、さきに申しましたように、光明遍照・無碍円明、太陽の徳をあらわしたのですが、太陽は「一辺を照らしても一辺は照らさないし、昼は照つても夜は照らない。しかし、如来の智慧の光は常に全てを照らすのだから大日という」と説かれております。

いま、東の薬師如来、西の阿弥陀如来が本尊大日如来の左右にお坐わりになられたのは、大日如来の光明が世界の隅々まで遍く照らし、一切衆生を救われるすがたをあらわしたものでありますし、それは、この寺を現世安穩、後生善

処の法悦の道場たらしめようとする方丈さまの大誓願のあらわれであります。

この方丈さまの大誓願はまことに素晴らしいものでありますし、錦戸先生のお話のように、仏像制作には一躰二年もかかるというのに、わずか五年の間に衿羯羅童子・制吒迦童子、大日如来、そして薬師如来、阿弥陀如来と五躰の仏像が次々と造顕されたことは、仏天の加護なくしてなし得るものではありません。そこで私はさきほど開眼の法語の最後を次の偈で結んだのであります。

発心貫徹不尋常 発心の貫徹、尋常ならず

二仏像成坐御堂 二仏、像成り、御堂に坐す

仏徳莊嚴開法運 仏徳を莊嚴して、法運を

開く

人天歡喜仰慈光 人天歡喜して、慈光を仰

ぐ

発願文

当寺を開創して二十三年
 を開しいま檀徒教は横浜
 随一の多きに達した又
 開創十五周年を記念して
 祭足した報恩行の一端と
 しての海外留学僧派遣育
 英の事業も願調に進展し
 ていりこれ一重に開山
 椽庵白純大和尚が如披に
 了るもので鳴謝に堪えな
 い今年十三回忌正當の
 勝縁に因み阿弥陀如來の
 尊像を造立し以て品位を
 増崇し上慈衛の鴻恩に酬
 いんとすりものである
 冀くは開心大和尚永く御
 加護を垂れ給わんことを

佛地二五七年 平成三年 上月念八日

成善心善光寺二世

黒田

武志



奉納される前の尊像(錦戸師のアトリエにて)

